平成17年6月30日発行（年4回 3·6·9·12月5日発行） 通巻74号

CYR News Letter

子どもたちの明日

CYR設立25周年記念号

左上：カンボジアの保育所
左下：タイの保育所
右：カオイダン難民キャンプ「希望の家」
© 小林正典

CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

2005年6月 NO.74

CYR 25周年によせて

代表理事　深水正勝

この記年号を手にされるみなさまにひと言ご挨拶をさせていただきます。

「草創のころのこと」を読むと「幼い難民を考える会」の原風景が生き生きとまぶたの中に甦ってまいります。原点というものは、あれから25年たった今も私たちにとって貴重な発想を与えてくれる、尽きることのない泉のようです。

「長く続けることの大切さ」、「自分にもできることがきっとある」の短いお話の中には、継続性、視点、専門性という3つの特徴でこれまでの活動を要約してあります。これからも私たちの活動を考える中で大切にしていきたいことです。改めて、辰濃和男さん、見坊和雄さん、大槻英二さんの寄せてくださった草稿に心から感謝を申し上げます。

関口さん、ゴイさん、プントゥアンさん、ペン・セタリンさんは、この25年間という歩みの中で、それぞれの人生の少なくともある期間、CYRの様々な活動に身をおいて活躍してくださった、多くのボランティアの方々の中から代表してお話を寄せていただきました。実に多くの優秀な方がたの献身的な支えが思い起こされます。ここでお名前を挙げることはとてもできませんが、ご自分の体験をこれらの貴重な話に重ね合わせて、思い起こしていただきたいと思います。

いいぎりゆきさんの原稿は、この時点で私の手元にはありませんが、ここに改めて言うまでもなく、国連難民高等弁務官事務所の担当官として、アフガン難民の押し寄せていたパキスタンのペシャワールに派遣されるまでの、創設以来のCYRをサケオ、カオイダンの「希望の家」で率先して活動、若い人たちの指導を実践されて、CYR発展の土台を築いてくださったこと、彼女の発想は今も私たちの活動の中に、若い後継者たちに引き継がれていることを記念したいと思います。最後に、ニュスレター25周年記年号を企画し、多くの可能性の中から、的を射た草稿を考えまとめてくださって、この仕事を最後にスタッフを退かれる、長谷川恭子さんにありがとうと申し上げます。

CYRニュースレター

子どもたちの明日
CYR設立25周年記念号

もくじ

「CYR：難民との出会いから得たもの」いいぎり ゆき ・・・・・ 4

CYR25年のあゆみ ・・・・・・・・・・・ 6

「外野席から見た草創のころのこと」辰濃 和男 ・・・・・・・ 10

「タイの保育所の現在」シビカ・プラコブサンティスク ・・・・・ 12
コラム：数字で見る歴史の一端

「長く続けることの大切さ」見坊 和雄 ・・・・・・・・・・ 14

「親の働く姿を見て子は育つ」ペン・セタリン ・・・・・・・ 15

「自分にもできることがきっとある」大槻 英二 ・・・・・・・ 16
コラム：CYR東京事務所変遷

「これまでの25年、これからの25年」関口 晴美 ・・・・・・ 18

25年間で出会った子どもたち ・・・・・・・・・・ 20
～子どもから学んだこと、学んでいること～

コラム：「CYRと出会って」ペン・パイ ・・・・・・・・・・ 28

カンボジアからのメッセージ プロム・ブントゥアン ・・・・・ 29

「CYRのこれから」事務局長 峯村 里香 ・・・・・・・・・・ 30

CYR：難民との出会いから得たもの

いいぎり　ゆき

カオイダン難民キャンプ「希望の家」
© 小林正典

1979年11月、雨の中、砲声が残る国境のジャングルからトラックがついた。タイ監視兵の前に、まるで濡れたボロ布の塊のようなひとが大勢、崩れるように降りてきた。

改革をめざしたポル・ポト政権下、1975年このかた200万人近くが犠牲になった餓えや虐殺、病気をまぬがれた避難民だ。この年の初め、ベトナムの侵入勢力が首都プノンペンを制圧したため、1980年までにタイに逃れたカンボジア人は25万人を超えたという。

あの頃、国境に近いキャンプはどこも避難民があふれた。家族を探す人、病人、けが人、迷子で大混乱だった。サケオキャンプのテントにも家族とはぐれた子どもが世話をうけていた。強い衝撃を受けたのだろう、宙を見たまま反応しない子の姿が痛ましかった。ゴザを間仕切りにした産室では、息を引きとったばかりの母親が地面に横たわっている。看護婦の手の平で未熟児がかすかな息をしていた。病棟とは名ばかりのテント村。悪臭が漂い、村むらのお寺では火葬が追いつかなかった。給水車やトラックが、ひっきりなしに赤土の跳ねを飛ばして過ぎる。心の支えを失ったひとたちは、配給の時以外はテントにこもったままだ。憤りと悲しみに胸をつかれながら先を急いでいるとき、思いがけない光景が目にはいった。テント裏の小高いところに、小さな裸の子どもたちがいたのだ。病棟から出されるゴミの山で物を拾い、遊ぶ子どもたちは無心だった。

ニュースで伝わるカンボジア難民の惨状が信じられず、数日、仕事を休んでタイにきた私だ。運良くキャンプ入場の許可がもらえた。毛布やビニールが垂れ下がるテント。歩いていると突然、医療器具を煮沸する大鍋の蓋を手渡される。雑用は山ほどあった。

帰国便の座席で、私はつぎのキャンプ訪問を考えていた。頭を離れなかったのはゴミ山の子どもたちのことだ。なにかできることがあるはずだ。いま、この瞬間にも劣悪な環境で成長を続ける子どもがいる。キャンプだからこそ、子どもが未知の世界を探索し、安全でいのちを大切にするいたわりのある環境が必要だ。それは外の人間が用意するのではなく、子どもの家族、地域がつくる。仲間を探そう。それが実現するように手伝うのだ。できることから始め、始めたことを続ける。難しいことではないと思った。

友人で保育現場にいる山極小枝子さんにキャンプの話を

した。数日後、山極さんから、園児の親たちが応援を申し出ているとの知らせがあった。園児がキャンプの様子を親に伝えたのだ。子どものことになるとすぐ意見が合う山極さんを説得して、年末の休みを一緒にキャンプで過ごすことにした。現場では、緊急援助の態勢から、帰国がむずかしい難民の教育や職業訓練のプロジェクトに力をいれる時だった。準備することが頭を離れない。カンボジア留学生の手助けで、死蔵されていたクメール語絵本を復刻する話もできた。難民がきっかけで、知り合いがたくさんできた。プノンペンに残された弟妹を案じるペン・セタリンさんもそのひとりだ。後のCYRの設立から現在まで、一貫して組織を率いてきた深水正勝神父や、理事のシスター広戸直江に紹介されたのもこの頃だ。二人は教会のボランティアに加わりサケオキャンプの状況を知っていた。

12月9日、いささか先走って「幼い難民を考える会」の名で、日本からのボランティア支援を呼びかけるアピールを出した。「会」が発足する2ヶ月前だ。「幼い難民」とうたった本意は、子どもは独立した人格で、おとなの難民に付属する存在ではない。未熟であっても成長の過渡期にある個人だという視点を伝えたかったからだ。また、「会」は相手を助ける組織ではなく、助けたい相手が自立できるような協力をして、子どもが置かれた状況から学ぶ組織であるべきだとも考えた。賛同者がいれば、やがて組織は形をなすと考えた。

年末に戻ったキャンプは、各国政府やNGOの組織的な支援が目立ち、すっかり落ちついていた。英語の通訳は都会出身の中国系の人が目立ったが、ニッパ椰子の小屋にいる黒パジャマのクメール・ルージュのグループを極端に恐れ、近づくのを厭がった。後から加わったらしい自由クメールのグループは表情も明るく、共同テントでは籠を編む姿もあった。タイ人から仕入れるのだろう、野菜、卵、砂糖、味の素などを板台に並べて商うのは中国系の女性だ。人びとは、日本から持ってきた針、はさみ、布地に大喜びだった。子どもの遊びに用意したゴムひもは、照れながらズボンを前で押さえる男たちに奪われてしまった。

1980年2月、全国から賛同者の善意が集まって会は発足した。3月、私はキャンプでの仕事に専念したくて、出版社を退職した。一刻も早く、現場に戻りたかった。流動的なキャンプでは、難民問題の解決策として、帰還、第三国定住、避難地での定住、が検討されているはずだ。カンボジアへの帰還やタイでの定住に現実性はない。キャンプでは誰もが欧米への定住を夢みていた。3月半ば、会が派遣するボランティア第一陣として、私は元青年海外協力隊員の青年と現場に向かった。「幼い難民を考える会」の英語名Caring for Young Refugees (CYR) のプロジェクト案は、13万人の難民が暮らすカオイダンでの実施が検討された。国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の現場責任者とバンコクの本部の教育担当官の裁量である。地域ぐるみの保育活動の計画は歓迎され、ユネスコ事務所の協力もあったが、予算と敷地の配分、建設の時期がきまらず、契約書が交わせない。契約なしには、キャンプ出入りの資格がとれない。本部と現場との連携の難しさは、UNHCRも生まれたばかりのCYRも同じだった。当時、バンコクからキャンプまでバスで5、6時間かかった。キャンプ近くに宿舎が必要だったが、NGOがあふれる国境の町に、予算にふさわしい家がない。HCRとの折衝に時間がかかり、足もなく、寝る場所もない私たちは、別々に知り合いの世話になっていた。そんな折、人手不足を心配してか、東京事務所はボランティア2名を週末に出発させると伝えてきた。雨季には間があったが、デング熱が蔓延する4月だ。やっと見つけた宿舎は家とは名ばかりの高床の住まい、飲み水の甕にはボウフラが泳いでいる。暑気にたじろぐ新参のボランティアふたりは、炎天下のヒッチハイクと言葉が通じない毎日に音をあげながらよく耐えた。だが、やがて高熱を出した。デング熱だった。

この教訓はその後の健康管理に役立った。誠実にキャンプの人に関わり、それぞれの人生を築いていったボランティアと職員たち。CYRが今日もつネットワークや組織の土台は、暮らしを根こそぎにされたカンボジアの人たちから得たものだ。人は生きる上で失い、失ったものから再び支えを得る。あの子どもたちも今は子育てをする歳だ。子どもたちの命の輝きを見つめ、組織を支えてきた大勢の深い心。私たちは代えがたい宝を共有している。

プロフィール

本名、佐藤幸江。東京生まれ。幼児の目に空襲の記憶がある。65年ハートフォード大学卒業。アメリカ、イギリスのモンテソーリ小学校で教える。帰国。69年講談社インターナショナル入社。73年から上智モンテッソーリ教員養成コース講師。80年幼い難民を考える会代表理事、後に理事。83～95年国連難民高等弁務官事務所職員。著書「創造性教育」(共著有斐閣)、「難民の子:いのちの響き」(大月書店)。訳書「モンテソーリの発見」(エンデルレ書店)など。

CYR 25年のあゆみ

難民キャンプから現在まで、カンボジア、タイ、日本で活動を続けてきたCYR25年のあゆみをまとめました。

カンボジアと世界の情勢	年号	CYRの活動
ロン・ノル将軍のクーデター発生 カンボジア内戦ぼっ発	1970	
ベトナム和平協定調印	1973	
クメール・ルージュ（ポル・ポト派）が プノンペンを制圧、政権を握る ベトナム戦争終結	1975	
ポル・ポト政権が崩壊 ヘン・サムリン政権が起こる 大量のカンボジア難民が流出 タイ国境のカオイダンに難民キャンプ開設	1979	いいぎりゆき（設立代表）他が難民キャンプを訪問 帰国後、キャンプの実情を訴え、支援を呼びかける
	1980	2月17日、幼い難民を考える会（CYR）が設立 聖心女子大学内（東京都渋谷区）に日本事務所を開設 ニュースレター第1号発行 カオイダン難民キャンプ ・保育者の育成を開始 ・クメール語の絵本・童話・文字表などを配布 ・保育センター「希望の家」を開設

（カオイダン難民キャンプ）

（難民キャンプでの職業訓練）

カンボジアと世界の情勢 ・・・ 年号 ・・・ CYRの活動

1981 カオイダン難民キャンプ

・洋裁・織物・木工の職業訓練を開始

・童話「孤児ケマラ」を出版

・カンボジア語で「保育の手引き」を出版

・童話・絵本11冊を復刻・配布

ヘン・サムリン政権と3派連合の紛争続く

1982

1983 外務省管轄の国際救援センター保育室で、
ベトナム定住難民の子どもの保育に協力開始

（希望の家）

1985 カオイダン難民キャンプ

・家庭や定住先で使える保育教材セットを配布

毎日新聞福祉顕彰特別賞「国際青年年賞」を受賞

1986 カオイダン難民キャンプ

・カンボジア文化を伝える布絵を製作

1987 カオイダン難民キャンプ

・母親教室を開始

カンボジア語による電話相談を開始

東京弁護士会人権賞を受賞

カンボジア和平をめぐるASEAN会議

1988 タイ

・難民キャンプ周辺の被災村で支援の事前調査を開始

在日インドシナの人々のための生活情報誌
「こんにちはCYRです」を創刊

外務大臣賞を受賞

（希望の家）

1989 カオイダン難民キャンプ

・伝統的な遊びとゲームを紹介したカードを製作

カンボジア

・プノンペン周辺の村で支援の事前調査を開始

東西ドイツ統一

パリ和平会議再開

1990 タイ

・アランヤプラテート郡で保育事業に協力開始

・パライ村・ノンヤプロン村で保育者育成を開始

東京都新宿区に日本事務所を移転

毎日新聞国際交流賞を受賞

カンボジアと世界の情勢	年号	CYRの活動
パリで4派による和平協定調印 シハヌーク帰国 ソビエト連邦崩壊	**1991**	カオイダン難民キャンプ ・手工芸品制作プログラム・養蚕プログラムを開始 ・「応急手当の布絵」を製作 カンボジア ・プノンペン事務所（CYK）を開設 ・カンボジア政府と活動協力契約を結ぶ ・カンダール州にプレイタトウ保育所を開設 ベトナム語による電話相談を開始
国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）が活動を開始 カンボジア難民の帰還開始	**1992**	カオイダン難民キャンプ ・「育つ難民の子たち：アジアでの試み（保育の手引）」をカンボジア語・英語で出版、他難民キャンプにも配布 ・保育センター「希望の家」閉園、キャンプでの活動終了（93年3月にカオイダン難民キャンプ閉鎖） カンボジア ・プノンペン市にトロピエンタヌン保育所を開設
国連管理下の総選挙実施 シハヌークを元首とするカンボジア王国発足 カオイダン難民キャンプ閉鎖	**1993**	タイ ・タイ事業部門（DEC）を開設 ・アランヤプラテート郡で保育者合同研修を開始 カンボジア ・織物技術指導を開始 ・プノンペン市にチェンメン保育所を開設
	1994	タイ ・移動図書活動を開始 カンボジア ・パンキアン保育所を開設
阪神淡路大震災	**1995**	阪神淡路大震災で救援活動（移動保育「ぽっぽ」） 内閣総理大臣賞を受賞
	1996	在日インドシナの人々のための 「日本の暮らしに役立つ一生活ハンドブック」を出版
	1997	カンボジア ・CYK事務所内に織物研修センターを開設 ・歌絵本第1集「ぼくの犬アーキー」を出版（第2集「クメールのさと」は98年に出版）

カンボジアと世界の情勢	年号	CYRの活動

ポル・ポト死亡
第2回カンボジア総選挙

1998 東京都目黒区に日本事務所を移転

2000 タイ

・DECの活動が終了

東京都港区に日本事務所を移転

2001 カンボジア

・バッタンバン州で、現地NGOソバナの保育事業に協力開始（2003年終了）

・バンキアン地区で小規模生活向上資金の貸付けを開始

特定非営利活動法人格を取得

・カンボジア保育所のための「10円給食募金」を開始

プノンペンでASEAN首脳会談開催

2002 カンボジア

・タケオ州トロピエンサーブ地区に織物研修センターを移設

・CYK保育所と近隣の村で子どもの健康栄養調査を実施

・3作目となるクメール文字表を製作

・CYK保育所の卒園児調査を実施

2003 カンボジア

・タケオ州トロピエンクラサン地区の地域学習センターに織物研修センターを移設

・現地NGOケマラに協力してプノンペン市内の2保育所を再開

・「クメール文字絵本」を出版、文字教材の研究・製作に力を入れる

シハヌーク国王退位、
長男のシハモニが新国王に
スマトラ沖大地震・津波災害発生

2004 カンボジア

・教育省の要請を受け、カンダール州の公立幼稚園への保育研修事業に協力を開始

2005 カンボジア

・テッカポンヨ公立幼稚園を開設し、サムロンクロム地区の2保育所（チェンメン・トロピエンタヌン）は閉鎖統合（10月予定）

・バンキアン地区の2保育所（バンキアン・プレイタトウ）の保育所運営委員会が発足

・小さな絵本シリーズを出版

タイ

・津波被災者支援の現地調査を実施

外野席から見た草創のころのこと

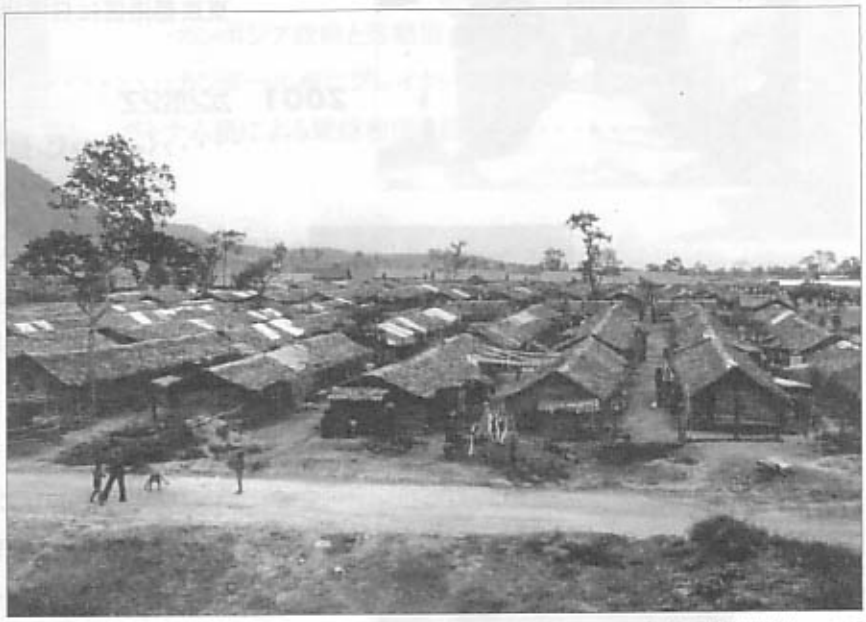
辰濃和男

「アイ・ラブ・ユー・マイ・ビューティー」とささやき続けながら、ダイアンは、抱いた未熟児の顔をのぞきこんでいた。

ファッションモデルをしていたというこのアメリカの女性は、赤ちゃんの下痢便で汚れた手を清めながら、こういった。

「この子たちが病んでいるのは、からだだけではありません。心も病んでいます。いつも抱きしめ、愛撫してくれる人が必要なんです」

ダイアンのそばで、スイス国籍の女性ミューレは「ウララ、ウララ」と陽気にロずさみながら病床の乳幼児の看護にあたっていた。薄緑色の制服を着て治療を続けているのはイスラエル医療班の医師たちだった。



カオイダン難民キャンプ

1979年のことだ。私は当時、朝日新聞にいて朝刊のコラム「天声人語」を担当していた。コラムを書いていると、どうしても自分の目で現場の姿をたしかめたいという思いにかられることがある。その思いを抑えきれずにバンコクへ飛び、タイ・カンボジア国境のサケオ難民キャンプに向かった。11月だった。カンボジア難民の数が8万とも17万ともいわれていた時代だ（サケオだけで3万を超す難民がおり、マラリアや栄養失調で死ぬ人が続出していた）。

あのとき、キャンプ内にただよっていたにおいを、なんと表現したらいいのだろう。遺体置き場のにおい、土煙のにおい、馬糞のにおい、集団便所のにおい、消毒液のにおい、薪をたく煙のにおい、そういうものの入り交じった強烈な臭気がいまでもふっとよみがえることがある。

いくつもの凧があがっていた。凧をあげる子がいたのだ。栄養失調で死ぬ子がいるキャンプでも、遊びたいという子の思いは生きていた。薪の束を頭に乗せて運ぶ少女がいる。天びん棒でバケツの水を運ぶやせ衰えた少年もいる。その一方で、笑いたわむれながら水を浴びる少女の姿があった。キャンプには死と生があり、悲嘆と活力があった。

あのとき、たくさんの国の医師、看護師、ボランティアの若者がかけつけていた。しかし、日本人の姿を見ることはなかった。当時、国際ボランティアという形のものは日本にはまだ根づいていなかったと思う。

あなたはなぜ、かけつけたのですか。各国から救援に来た人たちにそう尋ねた。多くの人が答えた。

「ビコーズ・ゼイ・ニード・ヘルプ」

ボランティアの本質を単純明快にいいあてた言葉だった。

当時の私たちに「金やモノさえ送れば」という思い込みがなかったかどうか。現場に飛び込み、雑用をし、モノを運び、乳幼児の世話をする人がいて初めて金やモノが生きると想像する力こそが大切なのだ。難民キャンプの現場でそのことを学んだ。

数日後、再び難民キャンプへ行った。いいぎりゆきさんは、キャンプで会った最初の、唯一の日本人だ。モンテソーリの教育学を専攻したいいぎりさんは、幼い難民の「心のケア」を思い、バンコクでたくさんの遊びの素材を集めたという。

そして、キャンプ内の子どもたちと一緒になって遊んでいた。遊ぶうちに子どもたちの目が輝き、笑顔を見せはじめ

カオイダン難民キャンプ「希望の家」

る。その様子を手品を見る思いで私は眺めていた。

「からだの傷を治すのは難しいが、ここには医療チームが来ています。医療で治せるものは治せます。しかし、心の傷は誰が癒すのでしょう。早くしないと手遅れになります」。いいぎりさんがいった。ダイアンもいっていたことだが、ではどうしたらいいのかとなると私には見当もつかなかった。

その後、いいぎりさんの友人の山極小枝子さんたちがキャンプ入りし、CYRの組織が形をなしてゆく。

「幼い難民を考える会」

というネーミングを聞いたとき、私は新鮮な感じをもった。仕事の対象を幼い子どもの保育という一点にしぼったのがよかった。

当然のことながら、最初のうちは資金のやりくりが苦しかったらしい。「このまま送金しないと、現地の××さんが飢え死にしちゃう」。むろん冗談まじりだが、そんな悲鳴を聞いたこともある。私のようなものにカネを集める才覚があるはずはないが、旧知の大友よふさん（当時の地婦連会長）を尋ねて寄付をお願いしたり、CYRの人びとが有楽町で街頭募金をするのを手伝ったりしたことを、いまはなつかしく思い出す。

やがて、国連難民高等弁務官事務所から、難民の子どもたちの保育活動はCYRにまかせるという連絡が入った。なにもかも自分たちでするのではなく、実際の保育活動の主役をカンボジア人の経験者にまかせ、自分たちは「縁の下の力持ち」に徹する、という方針だ。これもよかった。会はたくましく成長していった。

80年の末には「希望の家」が誕生した。私も、開所式に招待された。行くことはできなかったが、その招待状にあった幼児の絵を見て心がやわらいだ。何輪かの赤い花を描いた絵だった。

「そうか。キャンプの子どもたちも『花』を描くようになったのか」

と思った。私が訪ねたときのキャンプには、花はなかった。やせ衰えた子どもたちは、うつろな表情で赤土の上に坐り、赤十字が配るミルクの容器をしっかりと手にもっていた。難民たちに、草花のタネをまき、花を咲かせるゆとりがでてきたのだろう。

私がいいたいのは、あの餓死者の続出していたキャンプ、土煙と消毒液と糞尿の臭いに満ちた風景こそが、幼い難民を考える会の原風景だということだ。その原風景のなかに、さきがけて飛び込んだのが会の草創の人たちだった。先達たちは「心のケア」の面で、きわめて創造的な実践を続けてきた。しかも、カンボジアの人たちの「自立」を忘れることなく、はかりしれないほどたくさんの果実を実らせてきている。そういう組織と長い間おつきあいできたことを、一ジャーナリストとして誇りに思っている。

プロフィール

1930年東京生まれ。53年東京商科大学（現一橋大）卒業。朝日新聞社に入社し、ニューヨーク特派員、論説委員。75から88年まで「天声人語」を担当。現在、日本エッセイスト・クラブ理事長。雨水市民の会会長。著書に「辰濃和男の天声人語〈人物編〉、〈自然編〉」（朝日文庫）、「文章の書き方」、「四国遍路」（共に岩波新書）など。

タイの保育所の現在

シビカ・プラコブサンティスク

保育所で子どもを優しく見守るゴイさん

シビカさん（通称ゴイさん）は、難民キャンプからタイでの活動に至るまで活躍した元スタッフのひとりです。現在はバンコクで写真家のマネージメントや執筆を中心とした仕事に取り組んでいます。最近では、CYRのタイでの津波被災者支援で調査に加わり、再びCYRの仕事に参加しています。ゴイさんの存在は、CYRの過去の経験とこれからの活動をつなげる役割を果たしています。

CYRとの出会い

20年ほど前、私が大学院で勉強していたころ、タイ国境でのカンボジア難民問題が大きく報道されるようになり、何かできることはないかと思っていたときに、友人からCYRを紹介され、バンコクの事務所でパートタイムで手伝うようになりました。大学院を卒業してからは、フルタイムスタッフとして事務全般を受け持ったり、カオイダン難民キャンプを訪問して会議に出席したりしました。

タイの村での活動がスタート

難民キャンプで働いていたタイ人スタッフたちは、CYRでの経験をカンボジア国境沿いのタイの子どもたちへつなげていきたいという思いを強く持っていました。そこで1988年から、難民キャンプ周辺の村での調査とタイ政府への接触を進め、難民キャンプ閉鎖後、「子どもとその周囲の生活環境向上」を目標に、「DEC(デック)」が発足したのです。当時国境の村々はとても貧しく、子どもの健康や衛生問題が深刻でした。公立保育所では、ほとんど幼児教育の知識のない保育者が、大勢の子どもの保育に当たっている状況でした。

パライ村保育所

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

DECとは

(=Group for Development and Education for Children)

1993 年に難民キャンプのタイ人スタッフが中心となって立ち上げたCYRタイ事業部門。「デック」とはタイ語で「子ども」の意味。カンボジア国境のサケオ県アランヤプラテート郡で、公立保育所の保育者への研修、教材製作指導、保護者への育児指導、保育所のない村での移動保育・図書活動、栄養改善のための豆乳配布などを行った。タイ政府と協力しながら、子どもたちの教育・生活環境の向上をめざした。2000 年 6 月に、その役割を地域住民や政府に譲り、事業を終えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

DECの活動とは、単にモノを提供するのではなく、長い時間をかけて知識や技術を伝えていくものでした。最初は、政府の役人や地域住民、保育者たちに理解してもらうのに苦労しました。彼らがDECを受け入れるのに1年以上、活動を理解して協力してもらうまでにはそれ以上の時間が必要でした。保育者や住民とはだんだんと信頼関係を築いていきましたが、私たちと考えの違う政府と理解し合うのは難しかったです。保育所は内務省地域開発局の管轄下にあり、保育者はそこから給料をもらっていたので、政府の方針には逆らえないこともありました。

DEC閉鎖後の保育所は

DECが支援していたパライ村保育所とは今でも交流があります。元スタッフのプリスナーを通じて、保育者のジャンボンが時々私たちに電話や手紙をくれます。本やおもちゃなど頼まれたものを送ることもあります。なかなか時間が取れないの

ですが、私たちは2回、パライ村保育所を訪ねました。この4月に行きましたが、ジャンポン先生もゲー先生も元気でした。以前のとおり仕事熱心で、保育についての勉強を続けながら働いていました。

何年か前、政府の新しい方針に従って、保育所の管轄が地域開発局から、選挙で選ばれた地元の住民で構成される地方行政の委員会に移行しました。新しい委員会と地元の方針の中で、保育所は最初、放置されていました。委員会が未熟だったため、保育者、特に新しい保育者のための研修もなく、保育者を入れ換えてしまった保育所もありました。地域ごとに管轄が違うため、保育者同士のつながりや交流もありませんでした。新しいシステム下では当初、すべてがDECが活動を開始したころに戻ってしまったかのようでした。

しかし昨年は、管轄を問わずサケオ県全土の保育者を対象にした研修会が開かれるという良いニュースを聞きました。委員会は独自の財源を持っているので、保育所の備品を揃えるなどの予算を組むこともできます。委員会が保育所への理解を深めていけば、保育者と協力しながら、少しずつでも良くしていくことはできると期待しています。

DEC では、村の人たちと協力して子どものための教材を製作した

CYRでの経験をタイの子どもたちのために

ある面から見れば、CYRでの経験は私の今の仕事とは関係していないといえます。でも別の面から見れば、CYRで働いたことがとても役に立っています。CYRで働いた時期を通じて学んだこと、自分を成長させてくれたことがたくさんあったと感じています。

私が難民の苦悩について知ったのは、あのときが初めてでした。初めて本当の世界を知ったと言い換えてもかまいません。現実を見て私はひどく打ちのめされましたが、同時に社会活動や子どもについて興味を持ちました。私は子どもの発達について、どんな学校でも習えないであろう多くのことを学びました。仕事の中で計画の立て方や分析、レポート作成や評価の方法などを身につけ、体系的な思考能力を磨くこともできました。

CYRのこれまでと現在の活動、これからの取り組みについてとても共感しています。これからも子どもたちの未来のために、CYRといい関係を保っていきたいと思っています。

CYRを辞めた後は、友人の紹介で子どもたちへ学費を定期的に支援する以外、子どもに関わる活動はほとんどしていません。それでも、ノンフォーマル教育（学校教育以外の教育）について今でも興味を持っています。それはタイの子どもたちにとって必要なものであると思うからです。農村の子どもたちが学校外の活動ではあらゆる面で満たされていない一方、都市の子どもたちはコンピューターゲームやテレビに膨大な時間を費やしています。私は何年も前から子どもの本を集めていますが、いつか都市の子どもたちのために私立図書館と活動センターのようなものを作り、農村の子どもたちのために移動図書館を作りたいと考えています。いつ叶うかはわかりませんが、これが今の私の夢です。

コラム① ～ 数字で見る歴史の一端 ～

設立当初から現在まで、難民キャンプに飛んだ人、東京事務所を支えた人、タイやカンボジアで活動した人など、CYRには延べ75名の日本人職員が働いてきました。また、20名のタイ人、21名のカンボジア人が、職員として携わりました。加えて、国内でボランティアとして活躍した方は、25年間で数百名にものぼります。これにはバザーなどのイベント、定住難民の方の訪問、勉強会・講演会の実施、織物販売、その他さまざまな自主的なボランティア活動が含まれます。現在は、主に事務作業やイベントのお手伝いで約40名の方が関わってくださっています。

長い間いかに多くの方々に支えられてきたかがわかる、歴史の重みを感じる数字です。関わったすべての方の、数字では表せないさまざまな出来事や思いが、この25年間には詰まっているのでしょう。

長く続けることの大切さ

見坊和雄

見坊さんは、CYRの設立当初から12年間、理事として組織の確立や財政の基盤作りに尽力くださった、いわば「縁の下の力持ち」的な方です。現在は福祉新聞社の社長ほか多数の役職を兼務しながら福祉の分野で活躍なさっています。

CYRとの出会い ～サケオの難民キャンプで

CYRとの出会いはタイのサケオキャンプです。カンボジア難民のために最初につくられた大きなサケオキャンプで、いいぎりゆきさん（CYR設立時の代表）、山極小枝子さん（現CYR職員）と出会いました。まだCYRができる前のことです。

僕がサケオに行ったのは、全国社会福祉協議会（以下、全社協）の派遣した医療チームの状況調査のためでした。1980年12月に医療チームをタイに派遣し、その状況調査のため1981年、1月1日から9日まで現地を視察しました。

まずサケオに行きました。そこでいいぎりさんと出会ったのです。彼女はものすごく行動力がある人で、どこに行っても臆しない。ひとりでキャンプに飛び込んできたのでしょうか。日本大使館の小野寺参事官（当時）と夫人が一生懸命難民の世話をしていましたが、こういう人ともすぐに連絡をとる。全社協の事務局長（当時の見坊さん）が来たことを聞きつけて、すぐに話しかけてくる。「見坊さんはこれからどうする予定だ」と聞くので、「カオイダン難民キャンプはまだボランティアがあんまり入ってないようだから、カオイダンへ視察に行く」と言うと、カオイダンに行く車を見つけてきて私を引っ張っていく。

おかげで、サケオからカオイダンと難民キャンプを見てまわりました。1月5日の土曜日、バンコクのホテルで食事を済ませて休んでいたら、いいぎりさんから電話で起こされ、21時から夜中の2時までいいぎりさんと山極さんと難民対策について話し合いました。これが私とCYRとの出会いです。

CYRに求めること ～初志貫徹

僕が最初にCYRに言ったのは、10年は続けてほしいということ。ボランティア活動は、必要がなくなったら他のところに行くのが当然だ、という考え方もあるけれど、僕はこれには反対でした。たしかに難民救援活動は、「エマージェンシー（緊急）の段階から復興の段階まで、その難民を救援する」というだけの視点でとらえれば、他へ移るのは当然かもしれない。しかし、そうではない。これは難民たちとの約束、あるいは難民を受け入れているタイ、カンボジアの人たちとの約束でボランティア活動をやっているのだから、何年経ったからやめるとかそういうものではない。

保育所を卒園して成長した人も見守ってあげたい。その人たちが今度は自分たちで、自国の保育活動をやりたいと言ってくるかもしれない。CYRがすべてを直接やるのではなく、そういう保育者を育てるような拠点を広げてほしい。活動の基盤をしっかりと築いて本物が広がるようにしてほしいと思いました。

華々しく新聞に取り上げられて、やがて新聞に取り上げられなくなったから「さあ次は」というようなのは評価しません。CYRのような団体のおかげで、いろんな団体が海外へ行くようになりました。しかし1980年の頃、最初の段階に組織的に救援活動をやって、会を立ち上げて定着させて、それで成果を上げているのは、CYRとJVC（日本国際ボランティアセンター）、SVA（シャンティ国際ボランティア会）などでしょうね。そういう風に初志を大切にして、10年20年と続けてほしい。義務感ではなくて、自分たちで長く続けることの大切さを理解して、そういう気持ちでやってほしい。華々しいことをやって、世間をアッと言わせるのではなくて、初志をきちんと定着させることです。CYRはそれをみごとにやってくれたと思います。

プロフィール

全国老人クラブ連合会副会長。福祉新聞社社長。
大正8年生まれ、岩手県出身。

親の働く姿を見て子は育つ

ペン・セタリン

教育に携わるただひとりのカンボジア人留学生であったセタリンさんは、いいぎりゆきさんと出会い、カンボジアの子どもたちへの教育支援という活動内容に共感し、CYRの活動に関わることに。国内では、難民キャンプなどから定住したカンボジア人の相談に応じていました。

在日カンボジア人支援の難しさ

助けられないことがあるのです。不法滞在だとか。私の力の限界を超えるものですから助けられない。カンボジアではお金を出したりすると、人の顔が利いたりすることもあるけれど、日本には法律があります。総理大臣でさえ法律を犯せば、逮捕されることもあるのですから。そういうのがまだわかっていなくて、何でも頼るのですよ。でもひとつの勉強として、「法律があるから国が民主的になるのです、こういうのを見ておきなさい」ということは言っていますね。

日本での子育てで大変だったこと

娘、モニカの登校拒否です。保育園に通っているとき、毎日保育園を休ませてほしいと頼むのですが、理由は言いませんでした。私には仕事がありましたので休ませることはできなかったのですが、喘息で入院したある日、初めて行きたくない理由を娘が言ったのです。「モニカが保育園に行きたくないのは、先生が『お母さんがクメール語を話したら返事しちゃいけない』と言うからなの。でもお母さんのことは大好きだし、カンボジアもクメール語も大好きなの」と泣きました。私が「モニカのことはわかったよ。あの先生はだめ。もうあんなところ行かなくていい」と言うと、娘は嬉しそうでした。

小学校では、隣のお姉さんからもらったお気に入りのランドセルを「汚い」と言われたり、「お母さんがカンボジア人だから」仲間に入れないと言われたり、いろいろとありましたがその度に乗り越えてきました。あるとき学校に行きたくないという娘に理由を尋ねると、男の子が娘のお腹を蹴ってくるとのことです。それで私は「わぁ、あんたモテる子だね。男の子はね、告白のとき、愛してると言って蹴るのよ。日本の社会はお返しする社会だから、モニカはお返しに2回か3回蹴り返しなさい」と言って、娘に蹴り方を教えました。娘は「わかった、こうやるね」と学校に行って男の子が蹴る前に蹴ってしまい、先生から「モニカちゃん、暴力だめ」と注意されたそうです。娘は大喜びでした。先生が初めてモニカに話しかけた出来事だったらしいです。先生はモニカへの接し方がわからず、娘は自分の存在を認めてもらえずつまらない、そういう状態だったのではないでしょうか。

今は子どももおとなを信頼して楽しくやっています。いろいろありましたけど、今ではいい思い出になりましたね。

CYRに関わって、一番印象深いこと

親の働く姿を見て子は育つということですね。難民キャンプの保育園では、お母さんが織物など、お父さんが大工などをするそのまわりで、子どもたちが遊んだり勉強したりしていました。労働のありがたさ、またはいろんな角度から仕事はひとつではない、なんでも仕事になるよ、ということを子どもたちが自然に目にするのは、とてもいい環境なのです。

だから私もまねてプノンペンに子ども図書館を作っています。子どもたちが本を読みに来て他の人と触れ合ったりしています。お母さんたちはミシンを使って縫製をします。このようにいい活動は、自然に広まっていくし、CYRはそのための非常によい見本を作ってくれたと思います。

プロフィール

1954年プノンペンに生まれる。1973年プノンペン大学文学部入学。翌年、日本文部省の国費留学生として来日。現在東京外国語大学講師を始め複数の教育機関で教育に携わる。NGO「CAPSEA（東南アジア文化支援プロジェクト）」を創立し、移動図書館事業による子どもの教育支援などを行っている。

自分にもできることがきっとある

大 槻 英 二

大槻さんは、2001年に初めて取材でカンボジアのCYR活動地を訪れました。そのときの取材を元にした毎日新聞の「世界子ども救援キャンペーン」で「10円給食募金」を取り上げていただき、大きな反響を呼びました。それ以来、カンボジアでの経験を日本の子どもたちへ伝える活動にも、積極的に取り組まれています。

CYRを一言で表現すると

一言では言い表せませんが、特徴は3点あると思います。まず、25周年ということが証明する「継続性」ですね。支援にも、緊急と開発型の支援がありますが、ひとつのことを地道にやり続けるという「継続性」は素晴らしいと思いますね。その反面、25年経っても戦争から復興できないということでもあるのですね。いったんダメージを受けると、再び立ち上がることがいかに大変かということがわかります。

もうひとつは「視点」です。ある状況の中で、どの人が一番弱い立場にある人かという点で、CYRは子ども、女性にスポットを当てている。また保育所をつくっているところも、都市ではなくて農村部ですよね。そういう視点の当て方がすごく的確だなと思います。都市というのは目が行き届きやすいけれども、農村部は忘れられやすいし、取り残されます。

3点目は「専門性」ですね。医療や井戸掘り、農村開発など支援活動にもさまざまな分野がありますが、保育はありそうでない分野ですね。小学校建設はさまざまな団体がやっているけれども、その前段階のところをやっている。

カンボジアで子どもたちに囲まれる大槻さん

10円給食募金

取材した時は保育所の中だけでなく、子どもたちの家庭訪問をさせてもらいました。保育所の中にいる子どもたちは明るくて元気でそのこと自体はいいことなのですが、それではその子たちがどんな暮らしをしているのかなということで、家庭訪問しました。

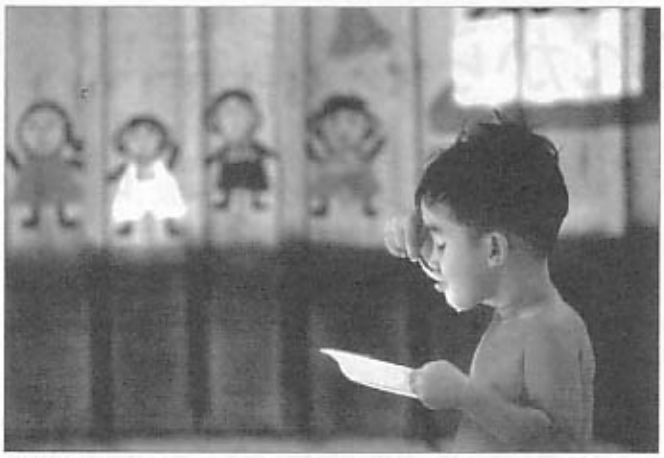
保育所に来ていない子の家を訪問すると、両親が田んぼで日雇いで働いているから、弟や妹のめんどうをみるためにその子は保育所を休んだ、といった事情がわかってきます。

CYRは「10円給食募金」というのに取り組んでいて、給食代として各家庭から毎月、米1kgと500リエル（約16円、2001年の取材当時。現在は2000リエル）を集めるのですが、半分近くの家庭が納められない。そういう家庭になぜ払えないのかを聞きに行くと、子どもが病気になりその薬を買うのに借金したとか、あるいは伝統的なまじない師にお金を払うために牛を売ってしまったとか、給料を前借りしたとか、そうした事情がわかってきます。

ではなぜ子どもたちが病気にかかりやすいかというと、十分に食べられないから。子どもたちには、せめて保育所で1食は確実に食べられるようにする。そのためには、1人1食、日本円にして10円かかる。逆に10円を募金すれば、カンボジアの子どもが1日元気でいられるということがわかってきます。活動内容をストレートに伝えるよりも、なぜその活動が必要なのか、その活動がなかったらどうなってしまうのか、という背景を読者に伝えたいという視点で取材しました。

日本の子どもたちに一番伝えたいこと

実際、小中学校に行ってカンボジアの子どもたちの状況を話したり、写真を見せたりすると、日本の子どもたちはすごくわかってくれるんですね。自分の友だちのように、自分と同じ年ごろの子がこんな目にあっているのだと。おとなよりもむしろ子どものほうが共感してくれるし、私が語ったこと以上に想像力を巡らせて作文を書いてくれます。



© 小林正典

例えば、地雷は人を殺す兵器じゃなくて人を傷つける兵器だということを話しますよね。子どもが書いた作文を見ると、「地雷は人の体だけじゃなくて人の心も傷つける」と書いてあるわけですよ。日本の子どもたちの想像力も捨てたものじゃないなと思いますね。

いつも教室でやっているのは、14歳の少年が地雷で足を失ったという記事を再現する即興の朗読劇です。まず、生徒たちにカンボジアの農村をイメージした絵を書いてもらう。それから、バケツと椅子4個を用意してもらう。記事を少しずつ読みながら、その記事のような状況を演じてもらう。空き缶を地雷に見立てて新聞紙で隠して、少年がバケツを持って水汲みに行くときに地雷を踏んで倒れ、その近くにいた4人の友だちも破片で傷つくというのを演じてもらうんです。

片足を失うとどんなに不自由か。片足で立って歩き、模擬体験してもらう。その後、スライドを見せたり、あるいは書いてもらった絵を使って「君が兵士だったらどこに地雷を埋めるか」「君が難民で故郷に帰ってきたとしたら、どこが危ないと思うか」など、子どもたちと一緒に考えながら、カンボジアの状況が日本といかに違うかということを実感してもらいます。

子どもたちに必ず伝えるメッセージは「自分にも何かひとつ、できることがきっとある」ということです。結論を安易に募金活動に持っていかずに、カンボジアの子どもたちが少しでもハッピーになるためにはどうしたらいいかを考える。募金に取り組むにしても、この募金をどんな活動に使ってほしいかと考える。それぞれが自分の頭で考えを深めてほしいなと願っています。そういう意味では、「君のポケットに入っている10円玉ひとつあればカンボジアの子どもが1日元気に暮らせるのだよ」というCYRの「10円給食募金」はわかりやすいですよね。

世界経済がグローバル化してくると、国の序列化がはっきりしてくる。研究開発の頭脳部分を担う国、「世界の工場」として製造分野を担う国というふうに。経済的な側面から見ると非常に悲観してしまうのですが、文化的な視点に移すと、カンボジア人は非常におおらかさを持っています。家族を大切にしたり、日本人が失ってしまったもの、学ぶべきものをたくさん持っていると思います。必ずしも日本が戦後、歩んできたような道だけが「発展」「開発」ではなくて、アジアらしい、カンボジアらしい道を見つけてほしいし、私たち日本人はそれを支えるよきパートナーになれると思います。

プロフィール

1989年毎日新聞社入社。大阪社会部勤務中に「世界子ども救援キャンペーン」を担当し、取材でカンボジアを訪れる。2003年10月より東京社会部に勤務。現在、都庁記者クラブに所属し、三宅島帰島問題を担当。

コラム② ～ CYR東京事務所変遷 ～

最初の事務所はCYR設立前に、うめだ子供の家の一角(東京都足立区)をお借りしました。活動が始まった1980年には、聖心女子大学のシスター広戸のご協力で、学内のプレハブ(渋谷区)に移りました。ここでの10年間は、難民キャンプでの活動が日本でも関心を呼び、多くのボランティアが事務所に出入りした時代です。難民キャンプ後のタイ・カンボジアで活動が軌道に乗ってきた頃、マリアの御心会修道院の一棟(新宿区)で8年、さらに神保理事(当時)の別宅(目黒区)をお借りして2年を過ごしました。5年前からは、高橋理事所有のビル(港区)の一室が事務所です。この頃から、学校などでNGOへの関心が高まり、毎年全国から大勢の中学生が修学旅行などで事務所を訪れるようになりました。

このようにCYRの事務所変遷は、常に多くの方のお力添えによるものでした。事務所を移るたびに、新たな支援者が生まれ、CYRは成長することができました。

あらためてお世話になった方々にお礼申しあげます。

これまでの25年、これからの25年

カンボジア事務所長　関口　晴美

卒園式で記念品と卒園証書を渡す

CYRに関わり始めたきっかけ

幼稚園で働いていた姉からCYRがボランティアを募集していると聞いたのがきっかけです。インドシナ難民の状況をテレビや新聞で見て、難民の子どもたちにできることはないだろうかと考えていたところ、難民キャンプに行った保育者たちから、持って行ったおもちゃで子どもたちと遊んだらそれまでどんよりしていた子どもたちの目が生き生きと輝き始めたという話を聞いたのです。CYRは最初から子どもたちのための活動を支援することを目的にしていましたので、共感をもちました。実際に会が設立されたのは1980年2月ですが、私は1979年の終わりごろから電話番などのボランティアをしました。最初は事務所で会の活動への問い合わせや、寄付者へのお礼状を書くなどの仕事を手伝っていました。80年の9月から難民キャンプでボランティアとして働き始めました。28歳のときです。

難民キャンプ時代

行く前は死にそうな人がたくさんいたりして、大変なところだと思っていましたが、キャンプに行ってみたら思っていたより明るく活気がありました。竹とやしの葉の家が規則正しく並んでいて、鉄条網に囲まれ、自由に出入りはできませんでした。仕事は病院や救援団体の仕事など限られていて、食料や水、衣類もすべて国連機関からの配給に頼っていました。子どもたちは、保育センターができていたので思ったより元気に遊んでいて、お寺や学校も作られていました。絵や伝統舞踊などを教えたり、技術訓練を行うところもありました。外国に定住したいと強く望む人が多かったので、英語を教える塾は人気があり、お金が払えない人も窓の外に立って聞き耳を立てていました。

それでも病棟に行けば、戦闘や地雷で手や足をなくした人が運ばれてきたり、栄養失調で失明してしまった若い女性が技術訓練に来ていたり、親や兄弟をなくしたり、離れ離れになっている人たちもたくさんいたり、出会う人それぞれがみな、悲惨な境遇にありました。大きなキャンプだったので人も多く、闇商売も盛んで町のような雰囲気がありました。

現在のカンボジアの保育事業
～「保育所の自主運営」について～

「自主運営」の考えが受け入れられるにはまだ難しいことが多いです。社会全体の経済状況が良くならないと、親は子どもの教育にお金をかける余裕がありません。毎日の生活で精一杯、という感じがします。今年の初めに保育所の運営委員会のメンバーが、地域の人たちに選挙で選ばれました。できるだけ経費を減らし、これからどのように保育所の運営費用を作り出していけるかを検討しています。

保護者からの保育料（月2000リエル米1kg）の徴収率も上がってきてはいますが、NGOが支援している保育所だから、NGOがなんとかしてくれるだろうという考え方が多いのも、いなめません。

カンボジアでの衛生問題

活動を離れた間にプライマリヘルスケア教育（病気予防学）を学び、子どもを取り巻く環境を総合的に考える視点が大事であると考えるようになりました。

カンボジアでは下痢が原因で亡くなる子どもが多いのですが、飲み水を煮沸消毒して、普段から栄養のあるものを十

分にとっていれば、ちょっとした病気で亡くなる子どもが少なくなるでしょう。毎日の生活習慣は、手洗い、トイレを使うことなどがとても重要です。保育所では子どもたちが、井戸水でごしごし体を洗って水浴びをしたり、給食の後、歯磨きをしていますが、気持ちよさそうに楽しんでいます。保育所がある地域では、トイレのある家が増えてきましたが、今でも田舎に行くと、お手洗いがない家も多いのです。プノンペンには水道がありますが、田舎では雨水か井戸や池の水を使います。井戸が近くにない、乾期になると水が枯れるといった問題もあります。保健衛生を考える上で水の問題はとても大きいですね。

上：村で行われた保育所運営委員の選挙
中：公立幼稚園での研修で竹馬に挑戦する先生たち
下：保育所で手洗いを学ぶ

活動の広がり

現在、CYRが行っている様々な事業を一つひとつ見直しながら、重要でかつ必要な活動を、できるだけ多くの子どもたちに広げていきたいと考えています。

昨年から、カンダール州の公立幼稚園で教員の研修会を始めるなど、CYRの活動は広がってきていると思います。若い人たちが関心を持って、日本でもカンボジアでも継続して活動に参加できる人が増えていくことを期待します。

さらに25年たった50周年のCYR、カンボジアは

保育所に来る子どもたちは3歳から5歳ですから、25年経ったら30歳です。そのころには経済状況ももう少し良くなって、社会制度も整って教育省の予算も増え、幼児教育の分野にも予算がきちんとつくようになれば良いと思います。また、ケガをしたり病気になったときに安心して診てもらえる病院が近くにあることが望まれます。

CYRの25年後…。究極の目標としては会がなくなることですが、カンボジアの事務所はカンボジアの人たちで運営するようになってほしいです。保育所を出た子どもの中から、小学校の先生になりたい、保育所で働きたいと言う人が出たらいいね、と事務所で話しています。92年から保育事業を始めていますので、最初に保育所を卒業した子どもたちは今16、7歳くらいで、今度大学に行く子がいるかな、といった状況です。4ヵ所の保育所の卒業生は現在どうしているのか調べているところですが、保育所の卒園生は学校を途中でやめてしまう子も少なく、その後の就学状況もいいようです。

プロフィール

大学卒業後、空港ビルの管理会社勤務を経てカナダの大学に留学。帰国後英語教諭として1年間教壇に立つ。旅行会社勤務を経て、1980年9月、CYRのボランティアとしてタイのカンボジア難民キャンプへ渡る。1990年5月帰国。一度活動から離れ、1993年から1年間ロンドン大学でプライマリヘルスケア（病気予防学）を学ぶ。1994年CYRの活動に戻り、東京事務所勤務を経て、1999年からカンボジア事務所（CYK）所長としてプノンペンに在住中。1989年に（社）日本青年会議所TOYP大賞を受賞。

＊ P.14 ～ 19 のインタビューの全文は、東京外国語大学学生による CYR25 周年記念サイト「こどもの W @」でご覧いただけます。
http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ase/cam/komado/ （または CYR ホームページ http://www5a.biglobe.ne.jp/~CYR/ より）

25年間で出会った子どもたち

～子どもから学んだこと、学んでいること～

25年間、CYRは難民キャンプやタイ、カンボジアでたくさんの子どもたちと出会ってきました。子どもたちへの支援を通して、おとな自身が子どもたちの姿に勇気づけられ、平和のあり方を学んできました。そんな学び合いの数々を、25年にわたりCYRを見続けてくださった写真家・小林正典氏の写真でつづります。

子どもが自分でできるように

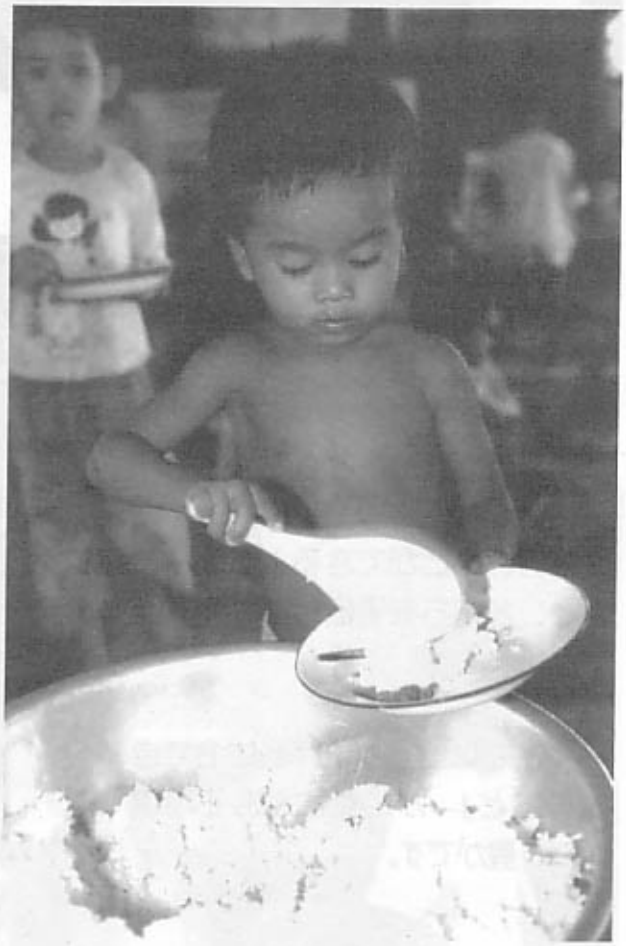
子どもたちは、自分の身の回りのことを自分でできるようになることに、大きな喜びを感じます。遊具・教材や備品の高さやサイズ、置き場所などを、子どもたちが使いやすいようにおとなが工夫することで、子どもの自主性を引き出すことができます。

子どもたちは鏡が大好き。目の高さに置かれた鏡を見て、おとなの手を借りずに身だしなみを整えられるようになります。
（カンボジア、プレイタトウ保育所）

自分の指を一本いっぽんていねいに洗うことは、病気の予防にもつながり、自分の体をあらためて意識する瞬間でもあります。
（カンボジア、マタピアップ保育所）

毎日の水浴びで、体を清潔にすることの気持ちよさを実感します。その体験が、やがて子どもが自分で清潔な環境を作り出すことにつながります。

（カンボジア、プレイタトウ保育所）

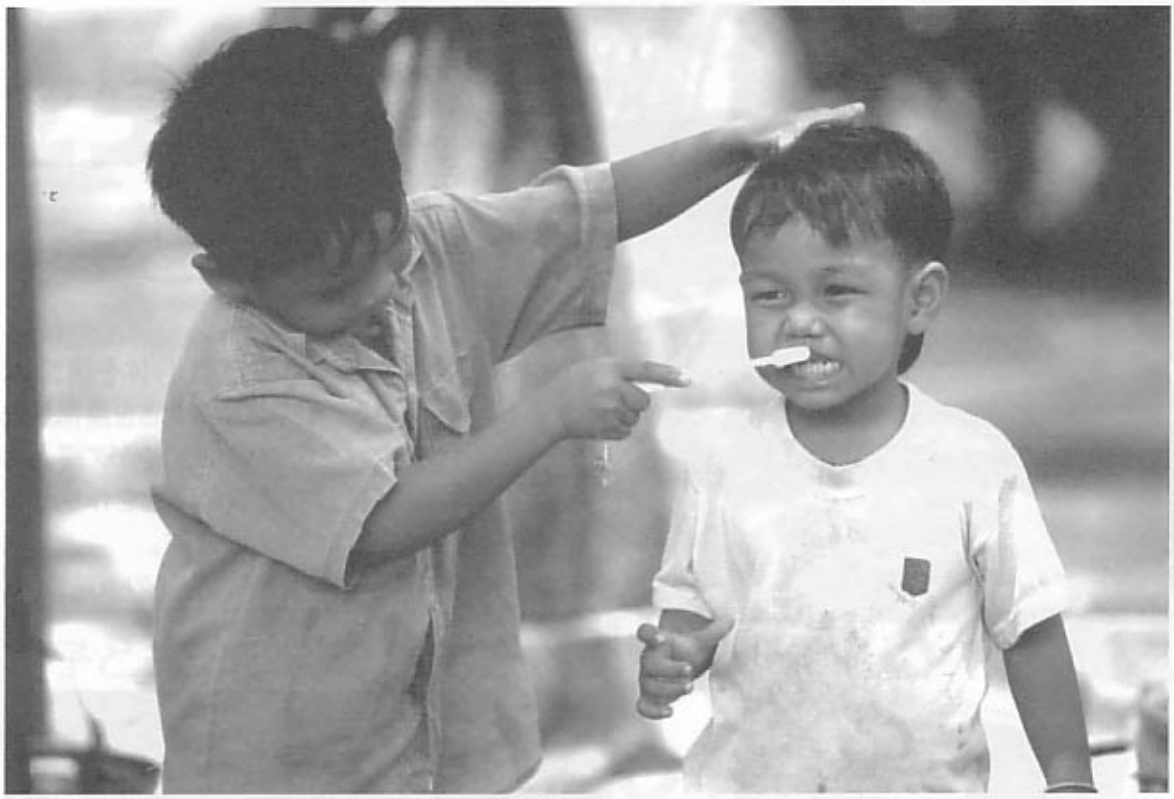


待ちに待った給食の時間。友だちの食べる分も考えて、食べきれる量をおかわりできるようになっていきます。

（カンボジア、プレイタトウ保育所）

歯みがき、「ペッ」って上手にできるかな？

（カンボジア、プレイタトウ保育所）



（カンボジア、プレイタトウ保育所）

私にもできること

保育所では、子ども同士の助け合いがよく見られます。
自分のことができるようになると、友だちを手伝わないではいられません。

子どもにとって、「私にもできること」 がたくさんある環境は、豊かです。

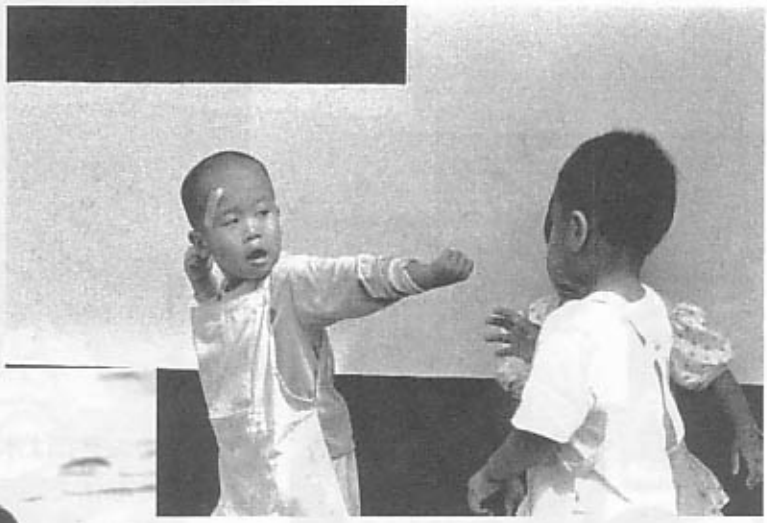
（タイ・カオイダン難民キャンプ、希望の家）

お母さんがおっぱいをあげるように、赤ちゃんに優しくミルクを飲ませます。赤ちゃんの反応から得た体験が、他者への思いやりを育みます。
（カンボジア、トロピエンタヌン保育所）

みんなと一緒に生きる

どんな場所でも、おとなの働く姿を見て、うれしそうにまねをする子どもがいます。
ときにはケンカをして、泣いたり怒ったりすることもあります。
保育所という小さな社会の中で、他者との関わりを通して、子どもたちは成長していきます。

ケンカも大切な経験。最初はすぐに手が出ていた子も、少しずつ口で自分の意見が伝えられるようになっていきます。
（タイ、ムアンパイ村保育所）



「あのさ…」子どもたちは一斉に友だちに耳を傾けます。いつでも一緒に考えます。
（カンボジア、プレイタトウ保育所）

見よう見まねで、うまく動かない手押し車の点検をします。
「ここ、押さえてて‥」みんなで協力しながら作業をします。
まるで車の修理屋さん。　（カンボジア、プレイタトウ保育所）

キャンプでは水も配給制。大切な水を一滴もこぼさないように、
小さな体でバランスをとりながら運びます。
（タイ・カオイダン難民キャンプ）

チャンスさえ与えられれば、子どもは自分ができる
お手伝いを喜んでします。誰かの役に立つという実
感が、子どもたちの自信につながります。
（タイ・カオイダン難民キャンプ、希望の家）

おとなが花を愛して育てる姿を見た子どもたちは、喜んで同じように世話をするようになります。
長い乾季には、毎日の水やりが欠かせません。
（カンボジア、プレイタトウ保育所）

腕や全身の力を使って登ることが大好きな子どもたち。子どもの手のサイズに合った太さの竹で作った縄ばしごは、修理と工夫を重ね、CYRでずっと作り続けている遊具のひとつです。
小さな手がしっかりと竹を握ります。
（タイ・カオイダン難民キャンプ、希望の家）

子どもたちは遊びの天才！

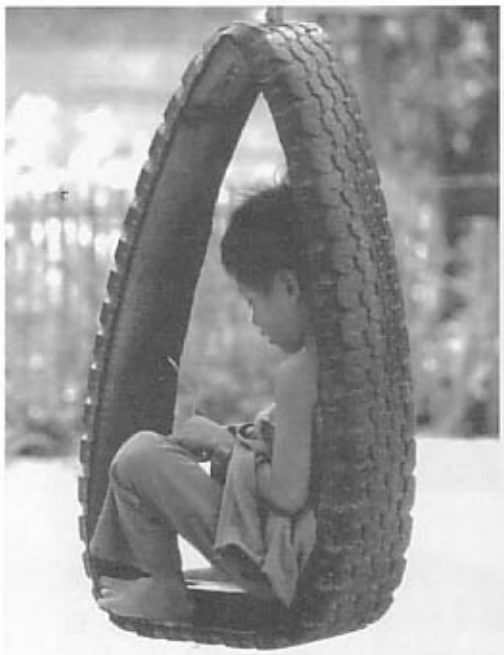
子どもたちは驚くほど独創的に、次々と「楽しいこと」を発見していきます。その感性を十分に伸ばすためには、おとなが子どもの自由な発想を妨げずに、そっと見守る姿勢が大切です。

手すりのない板1枚のCYRのすべり台。それでも子どもたちはケガをしません。きちんと自分の体を守る能力を身につけているようです。

（カンボジア、バッタンバン保育所）

CYRが製作した絵本には、カンボジアの童謡を集めた「歌絵本」や、文字に親しむための「クメール文字絵本」など多数があります。同じ絵本でも、ひとりで読んだり、みんなで楽しんだりと子どもたちによって多様な使い方が展開されています。

（上下とも：カンボジア、プレイタトウ保育所）



（カンボジア、プレイタトウ保育所）

小林正典氏プロフィール

1949年京都市生まれ。フリーのフォトジャーナリストとして、世界72ヵ国を取材。世界中の難民・飢餓・子どもの問題の取材にあたる。1980年より2000年までUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）と写真契約を結ぶ。1994年国連写真家賞受賞。主な著書：「難民・終りなき苦悩」（岩波書店）、「世界のお母さんマザー・テレサ」、「みなおなじ地球の子」（共にポプラ社）、「対人地雷　カンボジア」（毎日新聞社）、「国境を越える難民」（岩波書店）他多数。

どんな状況にいても、子どもは「今」を生きています。

まわりのおとなが、子どもたちの生きる力を引き出せるように配慮することで、子どもたちは平和な心を育てることができます。子どもにとって安心して暮らせる環境を作ること、その大切さを理解し、愛情と知恵をもって取り組むことができるおとなを増やすこと、それが25年間変わらずにCYRが続けてきたことです。

これからも子どもたちとの学び合いを大切にしながら、平和を紡ぐ保育を一歩一歩積み重ねていきます。

（カンボジア、チェンメン保育所）

コラム③

～ CYRと出会って ～　ペン・パイ さん

カオイダン難民キャンプ時代にCYRの保育センターで働き、今はご家族で日本に定住しているペン・パイさんにお話を伺いました。

出身はプレイヴェーン州です。メコン川流域から60kmのベトナム国境に近いあたりに、難民となってタイへ出るまで住んでいました。1979年にサケオ難民キャンプに入り、そこで妻に出会いました。カンボジアではずっと戦争でした。もう戦争が嫌でタイへ行き、彼女に出会ったとき、もしかしたら自分だって幸せになれるかもしれないと思って一緒になりました。けれどキャンプでの結婚は大変でした。クメール・ルージュの兵士がうろついていて、もしばれたら殺されます。私たちの結婚式は、夜中にみんなに集まってもらい、ひっそり行いました。

83年にカオイダン難民キャンプに移り、CYRの保育センターを知りました。CYRで働きたいと関口晴美さん（当時の現場での責任者）に言うと、「保育センターに泥棒が入らないように見張ってほしい」と頼まれました。それで85年から2年間、警備の仕事をしました。妻はCYRの織物教室に通い、難民キャンプで生まれた私の子どもたちは、保育センターへ行くようになって嬉しかったです。

私の仕事は、保育センターに出入りする人をチェックする、子どもを迎えに来た人が本当の母親かどうか確かめる、夜間に警備をすることでした。織物教室に泥棒が入るのを見たことがあります。キャンプでは物が足りなかったので、みんな勝手に持って行ってしまいました。保育センターのおやつやミルクも盗まれました。とても悪いことです。だから保育センターを歩き回って気をつけていました。昼間は花を植えたり、水をやったりもしました。

CYRの日本人職員のみなさんは大好きでした。優しくて、仕事は厳しい。いいことはいい、悪いことは悪いと言います。そこが本当に好きです。

CYRでは保育の勉強をしました。3ヵ月間の保育研修コースを終えると、修了証がもらえました。日本へ定住申請をしたときは、日本大使館の人に修了証を見せました。日本政府は、子どもが多い難民は受入れないと聞いていました。私は子どもが3人いて、日本へ行く直前に4人目が生まれました。本当は定住はだめだったのかもしれませんが、87年に家族で移りました。大使館の面接では、「日本は仕事が大変で休みが取れないが、それでも行きたいか？」と聞かれました。私は「仕事ができるなら喜んで行きます」と答えました。

日本ではCYRが引率して、カンボジア・ベトナム・ラオスから定住した子どもたちみんなで、長野県でホームステイをしました。私の子どもたちも参加して、日本人の家に泊まって遊んだり、楽しかったようです。

今は工場に勤めてコンピューターの部品を作っています。給料が安いので、妻が昼と深夜にスーパーでパートをしています。もう55歳なので、辞めても新しい仕事につくのは無理ですね。

数年前にカンボジアの育った村へ家族で行きました。食べ物が懐かしくてたくさん食べたらお腹をこわして死ぬ思いをしました。日本に慣れてしまい、汚い水が体に合わなかったり、電気がない村で夜真っ暗になると、泥棒が怖くて寝られなかったです。

CYRは今年、25年ですか？いい組織なので、たくさんの子どもたちを助けることができると思います。止めないでずっと仕事を続けてほしいです。30年も40年も続いてほしいです。

◆◆◆ カンボジアからのメッセージ ◆◆◆

織物研修センターのスタッフ

CYK(CYR のカンボジア事務所)のスタッフ

4保育所の保育者たち

日本のみなさまへ　　CYK 職員　プロム・ブントゥアン

ブントゥアンは、カオイダン難民キャンプ時代から15年来CYRの仕事をしてきた職員です。難民キャンプのCYR保育センターで事務と日本人スタッフの通訳をしていました。誠実な勤務ぶりと人柄は現在も変わらず、経理担当として責任ある仕事を担っています。

25年間カンボジアの子どもたちを支え続けてくれた、CYRと日本のみなさんに心から感謝しています。

私は難民キャンプからずっとCYRで働いているため、設立当初からの目標を明確に理解し、深く共感しています。カンボジアの子どもたちを25年間支援し続けてくれた日本のみなさんのように、親切で優しい人間になりたい、他の人々から信頼される誠実な仕事がしたいと願ってずっと働いてきました。

常に考えているのは、子どもたちのことと平和についてです。戦争はもう本当にうんざりです。カンボジアの子どもたちは、まだまだ助けと支えを必要としています。学校や物不足の問題だけではなく、多くの孤児、暴力、栄養失調など子どもに関する問題は山積していますので、未来を憂えずにはいられません。都市から離れた農村地域にも、保育所や幼稚園が増え、子どもたちが健やかに成長できる環境が整うことが私の夢です。

私は彼らのためにできる限りのことをしていきたいのです。保育所を出た子どもたちは、次の世代のことを考えられるおとなになるでしょうから。日本のみなさん、どうぞ継続的なご支援をお願いします。

ブントゥアンは、内戦で家族を失い自らも難民となるという、カンボジアの歴史そのものを生きてきました。難民キャンプに行き着くまでを語った、彼のキャンプ時代の原稿をご紹介します。

私が14歳のとき、クメール・ルージュが勝利を収め、プノンペンは陥落しました。その後移住を強いられ、人も住まず、夜になると野生の獣たちのうなり声が響き渡る深い森で寝起きしました。1ヵ月後、両親、兄弟と引き離され移動集団で過酷な労働を強いられましたが、両親が恋しくてたまらなくなり、こっそりと抜け出して会いに行きました。そのとき、両親と2人の兄弟がクメール・ルージュに残忍な方法で処刑されるのを目撃したのです。孤児となった私は食事の時間以外は休む間もなく、十分な食事も与えられず働かされました。ポル・ポト政権が倒れた後、カンボジアでの困窮生活を経て、タイの難民キャンプでの暮らしが始まりました。

CYRのこれから

事務局長　峯村里香

1980年代にカオイダン難民キャンプのCYR保育センター「希望の家」に通っていた女性と会いました。仲の良い友だちと、いつも笑いながら赤土の園を走り回っていた彼女は、今、5歳の男の子を育てるお母さんです。日本に定住後まもなく、生活の著しい変化と偏見に苦しみ体調を崩した両親を、当時小学生だった彼女は、弟妹の世話をしながら懸命に支えていました。「キャンプの思い出はもうあまりないけれど、天秤棒を担いで水汲みをしたの覚えています」と語りました。1992年までに希望の家を巣立った7833名の子どもたち。世界の国々で、思い思いの生き方を大切にしていることでしょう。

難民キャンプ閉鎖後、カンボジアで子どもの生活環境の改善に取り組んで13年。4つのCYR保育所を卒園した子どもたちの追跡調査を行いました。学校を辞めざるをえない子どもたちが増えていた現実は、生活の厳しさと、戦後の傷跡を考えさせられる結果でした。

6月のCYR総会に、カンボジアから3名の職員が参加しました。村の保育所の課題は、地域運営委員会による自主運営をめざすこと。担当のカンボジア人職員は、「難しいですが、時間はかかりますが、村の委員会と挑戦してみたいです」と、力強く言いました。その国の人々自身から出された声を真摯に受け止め、保育所の運営方法を共同で改善しながら子どもたちの保育を丁寧に見ていく、その試行錯誤がいよいよ始まります。

カンダール州の公立幼稚園で行う保育者研修・遊具づくりへの協力は2年目を迎えます。昨年の巡回研修のフォローアップでは、各園の環境や保育者の取り組みが一様ではないことが見えてきました。この評価結果を今後の幼稚園での保育研修に生かし、州や郡担当者の育成に協力します。また、都市の貧富の差が激しい地域の現地NGOによる保育所で、環境整備や保育者研修に努めてきましたが、今年は周辺の子どもたちの家庭訪問を行い、都市に住む人々の生活から学び、保育のあり方を模索していきます。

女性の生活向上と伝統保存を目的とした織物事業は、織物研修センターの運営方法を検討中です。自主運営をめざすか、研修センターがある地域学習センターとの連動に力を注ぐか、村の委員会との話し合いが続けられます。

公立幼稚園巡回研修のフォローアップでは、配布した教材で楽しそうに遊ぶ子どもたちに出会った。

2004年12月、スマトラ沖地震・津波が発生し、各地に深刻な被害をもたらしました。CYRが10年間活動していたタイでは、南部の海岸線で家々や学校、森林などあらゆる物と人々がなぎ倒されました。今年4月の被災地では、国際機関やNGOの大規模な緊急援助が一段落した後、復興過程における住民の職の確保、子どもたちの教育支援が始まっていました。CYRの元タイ人スタッフの協力を得て訪ねた被災地の村々で、小さな保育所を切り盛りする若い母親たちや、家庭訪問で家族の心のケアを行う現地NGOの職員に出会いました。CYRは、タイの人々と調査を続け、子どもたちへの支援を始めます。

この日本でも、子どもたちが危険にさらされるという社会の変化が報じられています。カンボジアで保育の現場を持つCYRが、日本で暮らす母親や子どもの仕事に携わる人々から話を聞き学びながら、将来めざす道を見定めることが必要とされる時期に来ています。幼い子どもたちが自ら育つ環境を創り出すには何が大切か、国を超えて、子どもの問題を心に留める大勢の人たちと共に考えながら、これからも歩んでいきたいと願います。

子どもたちの明日 74 号
CYR 設立 25 周年記念号

◆発行日：2005 年 6 月 30 日
◆発行元：特定非営利活動法人幼い難民を考える会
◆発行人：深水正勝
◆定価：¥200

CYRの活動をご支援ください

年会費

正会員	¥10,000	学生会員	¥3,000
団体会員	¥30,000	賛助会員	規定なし

下記の口座にご送金ください。

郵便振替：(特活)幼い難民を考える会 No.00110-8-36227

銀行振替：特定非営利活動法人幼い難民を考える会
東京三菱銀行六本木支店(普通)No.1351747

特定非営利活動法人
CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会

東京事務局
〒106-0046東京都港区元麻布3-2-20丸統麻布ビル2F
TEL：03-3796-6377 FAX：03-3796-6399
Email：cyr@mtb.biglobe.ne.jp
URL：http://www5a.biglobe.ne.jp/~CYR/

Phnom Penh Office
No.67 Samdech Sothearos Blvd., Sangkat Tonle Bassac, Khan Chamkar Mon, Phnom Penh, Cambodia TEL: +855-23-210849

写真　小林正典

今日の子どもの幸せが、明日の平和な世界につながります

1980年、内戦により難民となったカンボジアの子どもたちが、
タイ国境の難民キャンプの恵まれない環境のなかで、
少しでも人間らしい環境と必要な配慮のもとで暮らせるようにとの願いから、
幼い難民を考える会（CYR）の活動は始まりました。

難民キャンプ閉鎖後は、復興をめざすカンボジアで
子どもたちが安心して暮らせる環境づくりと、女性の自立を支援する活動に取り組んでいます。

会の名前を「難民の子ども」ではなく「幼い難民」としたのは、
子どもという独立した人格を尊重する立場から、子どもたちの成長が守られて初めて、
祖国を逃れてきた人たちの、あるいは、その国の自立の問題に結びつくと考えたからです。

また、「考える会」としたのは、助けるという意識がしばしば相手の自立を侵したり、
相手を管理する態勢に陥りがちであることを認識し、
難民問題をいろいろな側面から考えていきたいという会の基本姿勢に根ざしています。

私たちはこれからも、さまざまな理由により厳しい境遇に置かれている子どもたちの
健全な成長を支援し、その保護者たちが人間らしい生活環境のもと自立できることをめざして
一つひとつの小さな積み重ねを大切にしていきます。
そのことが、難民を生み出さない、明日の大きな平和を創る力となることを信じています。